

協働する経験は保育者養成校の学生にどのような影響を及ぼすのか —創作オペレッタの活動過程に着目して—

南谷 悠子¹

要旨

本研究の目的は、保育者養成校の学生が創作オペレッタに取り組んだ過程を、発表会の約半年後に、フォーカスグループインタビューを用い、振り返ることで、どのようなことを問題と認識していたのか、また、それは学生にどのような影響を及ぼしたのかについて明らかにすることである。その結果、学生は創作オペレッタの活動過程において、大きく 2 つの問題を認識していたことが明らかとなった。それは、製作にかかる時間と、練習時間の少なさについてであったが、これらの問題は関連しているといえる。製作に時間がかかった結果、練習時間の少なさにつながっていたと考えられるからである。本番が近づくとつれ、製作の時間と練習の時間とのバランスを取りながら、活動をスムーズに進めていたことも明らかとなった。時間の経過とともに、一人ひとりの意識の高まりや円滑なコミュニケーションの増加が、活動を推し進める原動力になったといえる。積極的に声をかけたり、自分の担当ではない製作物を手伝ったりする学生の姿は、周りの学生の意識の高まりや意欲に影響を与えていたと推察された。協働する表現活動の経験を通して、学生は視野を広げ、計画性や見通しをもつこと、そして、コミュニケーションを図ることの大切さを学んだと推察された。これらは、保育現場で生きる力であり、保育を志す学生にとって意義深い経験であったと考えられた。

キーワード： 協働 創作オペレッタ 活動過程 保育者養成 表現

1. 研究の背景と目的

筆者の前任校は、3 年制による短期大学であった。2 年制の短期大学に比べややゆとりがあるといえるが、保育者養成校であるため、当然ながら専門教育科目が多い。1 年次と 2 年次の学生の時間割は、空きコマがあまりない状況であった。1 年生のゼミナール（以下、ゼミと明記）は、基礎ゼミである。大学生としての学びの基礎を確かにし、保育者・教育者としての素地を養い、技能を磨くとともに、表現力を高めることが学修目標である¹⁾。2 年生のゼミは、保育者・教育者として、より専門的な分野の学びと表現力の向上を目指すことが学修目標である²⁾。3 年生のゼミは、「1. 広い意味で教育や保育にかかわるテーマで卒業研究に取り組み、その理解を深め、視野を広げる」「2. 既習の教科の内容やその関連性を踏まえ、卒業研究の執筆や制作を行う」「3. 書籍からの引用の仕方など、文章を参照する際のルールを理解する」の 3 点が学修目標となっている³⁾。1 年次は土台をつくり、2 年次で専門的な学びを深め、3 年次の卒業論文へという流れである。筆者は 2 年生のゼミを担当していたが、2 年生は年度末に発表会がある。これは近隣の保育園年長児と姉妹校の福祉・保育コースの高校生を招いて行われるものであり、毎年ゼミ単位で演目を決め、活動を進めて

¹ 短期大学部生活コミュニケーション学科こども学専攻

いく。合奏やダンス、クイズ、演劇等、一人ひとりの力が発揮でき、それぞれのゼミのよさが感じられる内容となっている。

学生は、演目を行うだけではなく、総合司会やつなぎも担当する。また、裏方（照明や音響等）、プログラムづくり、当日の子どもや高校生を出迎えるスタッフも担当する。当然ながら、準備期間も長く、ゼミの時間外で製作や練習を行うこともある。そして、少しずつ完成度を高め、本番を迎える。1年生のゼミは子どもとかかわる行事（七夕、クリスマスマーケット等）の準備期間が比較的短め（各行事、1カ月ほど）だったのに対して、2年生では発表会に向けて、準備期間が約6カ月を要する「協働する表現活動」を行うことが特徴である。

表現活動に関する協働的な学習について、朝野 [2010: 35-39] は、音楽聴取と物語創作によるグループワークにおいて、学生が対人援助職に必要な資質にかかわる気づきを得たことを報告している⁴⁾。また、大塚・三上 [2016: 53-69] は、壁面制作を通じた協働学習において、役割のローテーションにより、授業への参加意識や保育者視点の高まりがみられたことを述べている⁵⁾。他者と協働する表現活動を行うことによって、保育者としての資質を高めていく可能性があると考えられる。

他者とどのように協働していくかは、現代を生きていくためのキーワードのひとつである。中央教育審議会の答申 [文部科学省, 2014: 6] 『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について』の(2)「高等学校教育、大学教育を通して育むべき『生きる力』『確かな学力の明確化』において、③確かな学力、の中で、「(i) これからの時代に社会で生きていくために必要な、『主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）』を養うこと」と示されている⁶⁾。「主体性」「多様性」や「協働性」は、確かな学力のひとつであり、保育者にとって欠かすことのできない力であるといえよう。

オペレッタ（音楽劇のひとつ）や劇は、幼稚園や保育園において生活発表会で演じられることが多い。対象年齢は、イメージの世界を楽しむことができるようになる4歳児以上でよくみられる。オペレッタについては後述するが、劇について、山崎 [2014: 138] は、「劇とは多様な可能性を追求することのできる、子どもにとっては全面発達できるもので、総合保育です」と述べている⁷⁾。子どもとともに創りあげていく過程に醍醐味があると考えられ、保育者は子どもの思いを受け止めながら、そして、その思いを形にしながら活動を進めていく必要があるといえる。

保育者養成校の学生による総合表現活動の教育的効果を明らかにした研究は少ない。創作オペレッタの活動について、古屋・沢登ら [2012: 31-48] は、表現力が総合的に向上し、学生の人間性を養う格好の活動であったとし、課題遂行能力や問題解決能力も培われたことを述べている⁸⁾。また、ミュージカルの活動について、斎藤・時得 [2010: 23-39] は、学生に音楽的な感性が生まれ、協調性や社会性が培われることをとらえている⁹⁾。そして、オペレッタに取り組む過程の困難さについて、山本 [2021: 129-159] は、①表現力の向上、②協働して取り組む難しさ、③メッセージを子どもにどう伝えるか、の3点に学生は困難を感じていたことを明らかにしている¹⁰⁾。総合表現活動は、他者とかわりながら進めていく点に特徴があるため、ひとりでは学ぶことのできない学びがあると考えられる。また、取り組む期間も短くないため、どのように進めていくかというイメージの共有も大切であ

るといえるだろう。

先行研究において、総合表現活動の教育的効果を明らかにした研究は、いずれも質問紙調査によるものであった。本研究においては、フォーカスグループインタビューを採用する。フォーカスグループインタビューの特徴は、グループダイナミクスにより意見を引き出すことができる点にある¹¹⁾。本研究の目的は、保育者養成校の学生がゼミ活動である創作オペレッタに取り組んだ過程を、発表会の約半年後に、フォーカスグループインタビューを用い、ふり返ることで、どのようなことを問題と認識していたのか、また、それは学生にどのような影響を及ぼしたのかについて明らかにすることである。

2. 創作オペレッタについて

2.1. オペレッタと子どものオペレッタ

オペレッタとは音楽劇のひとつである。オペラ（歌劇）は、音楽と歌によってストーリーが進行する。しかし、オペレッタ（喜歌劇）は、音楽と歌、踊り、台詞によってストーリーが展開されるという特徴をもっている。オペレッタと構成要素が似ているものとしてミュージカルがあげられるが、ミュージカルはオペレッタと違い、ポピュラー音楽が用いられるという特徴がある。

子どものオペレッタについて、萩原 [2012: 27] は、「イソップ、アンデルセン、グリムなどの童話や日本昔ばなし等から取り上げたり、幼児たちが自ら劇遊びの中で創作したものも多い」としている¹²⁾。子どもは、自分たちの好きなお話を、歌や踊り、台詞によって表現し、お話の世界観を整えるために、衣装や大道具、小道具等をつくる場合もある。

2.2. オペレッタを通して育つもの

保育者は、オペレッタの活動が子ども主体で進むよう援助する必要がある。多くの幼稚園や保育園の生活発表会において、年中児や年長児にオペレッタ（あるいは音楽劇）の発表がよくみられることから、幼児教育・保育において子どもに経験させたい活動であると考えられる。子どものオペレッタは、ごっこ遊びや劇遊びの延長としてとらえることができる。南谷 [2020: 135-136] は、オペレッタの土台として、絵本からごっこ遊びをする、好きな場面を即興的に遊ぶ、一つの役割に固定せずに遊んでみる等の経験が大切であると述べている¹³⁾。自分の内にイメージをふくらませ、他児とイメージを共有しながら表現する過程の中に、子どもの育ちがあると考えられる。絵本や童話のお話をそのまま演じるのもよいが、オリジナルのオペレッタを子どもと一緒に創る面白さもまた格別なものとなるであろう。

オペレッタを通して子どもに育つものとして、南谷 [2020: 135-136] は、以下の4点をあげている¹³⁾¹⁴⁾。① 表現する喜びや楽しさ、② 自分たちで決めた、自分たちの活動という自信、③ 自分が認められ、他者を認めていくという経験、④ オペレッタの表現活動をやりとげることで得られる達成感、である。これらは、子どもに育つものとして書かれているが、学生にとっても同じなのではないだろうか。物事に進んで取り組むことができる学生ばかりではない。人とのかわりに苦手意識がある学生や、自信がない学生もしばしばみられる現状にある。創作オペレッタの活動は、「協働する経験」である。学生が感じ、考えたことを表現するという点において、まさに「学生主体」の活動になり得る。また、問

題が起こり、意見がぶつかったとき、どのように解決していくのか、さまざまな問題が起こる中で協働して活動を進めていくためには、やはりコミュニケーションが鍵となるだろう。

そして、保育者を志す学生が、総合表現である創作オペレッタを計画し、練習を積み上げ、発表することは、保育者になったとき大いに役立つと考えられる。何を準備しなければならないか、進め方はどのようにしたらよいか、表現するときに必要なことは何か、これらの点について自身が経験を積んでいることは、大きなメリットであるといえよう。

2.3. 創作オペレッタの概要

20XX 年度のゼミは、年度末の発表会にむけて、創作オペレッタに取り組むことになった。今回は、先にテーマ曲が決定し、そこからお話を考えるという手法であった。なお、ゼミ担当教員である筆者は、基本的に、見守る、というスタンスをとっている。

概要を以下にまとめる。

- ・子どもに育てたいものは何か → 「ともだちだいすき」という気持ち
- ・創作オペレッタのタイトル → 「おそらのおともだち」
- ・テーマ曲 → 「うちゅうせんのうた」
(作詞・ともろぎゆきお / 作曲・峯陽)
- ・エンディング曲 → 「にんげんっていいな」
(作詞・山口あかり / 作曲・小林亜星)
- ・創作オペレッタのストーリー → 仲良し3人組が遊んでいるとほっしーくんと出会う。ほっしーくんをお空に帰すため、子どもたちはお菓子やお花で宇宙船をつくる。宇宙船ののって出発し、魔法使いに出会ったり、宇宙人に出会ったりしながら星の町につく。最後は、宇宙船に乗ってみんなの町に帰ってくる。
- ・登場人物 → 子ども A, 子ども B, 子ども C, ほっしー, 魔法使い, 宇宙人, ほしお, ほしみ
- ・製作物 → 星のかぶりもの, 宇宙船, 木, 草, 宇宙の背景, 惑星3つ, 星の町の背景(天の川つき), お菓子, お花, トンカチ, 魔法使いの衣装, 宇宙人の衣装, 星の衣装

後期に入り、大まかな動きや台詞を決めた後、製作に入った。製作物が多く、作業は大変であったが、造形が得意な学生を中心に分担しながら進めていった。音楽や効果音についても工夫を重ねた結果、少しの工夫で表現がよくなることを実感していたようであった。本番直前の舞台上での練習では、「この台詞をたたみかけるように言う」「ここは間を取ってから台詞を言う」等、お話の流れを大切にしながらよりよくする工夫を行っていた。直前にいくつかの変更点があったが、皆が納得して決めていくことができた様子であった。

発表会は、諸事情により、子どもを招待することは叶わなかった。観客は、姉妹校の福祉・保育コースの高校2年生と子ども学科の1年生であった。本番ではアドリブも飛び出し、生き生きと表現することができた。子どもの反応がない中、やりにくさもあったと思うが、観客とやりとりしながら観客を引き込んでいくことができたように思われた。

3. 方法

3.1. 調査対象と調査時期

調査対象は、20XX年度2年ゼミ生9名の内、調査に協力した5名であった。調査時期は、発表会の約半年後であった。

3.2. 倫理的配慮

対象者に、研究目的や結果の利用、プライバシーの保護について、研究のみに使用することを説明した。また、同意するか否かは自由意志に基づくこと、同意しなかったとしても不利益は生じないことを説明し、同意を得た。

3.3. 調査方法

調査方法として、フォーカスグループインタビュー（以下、FGI）を採用した。主な質問項目の内容は、「創作オペレッタの活動過程において問題であったことは何か」、「創作オペレッタの活動過程において大切だと思ったことは何か」の2点であった。これらの質問に沿いながら、筆者があらかじめ作成したインタビューガイドをもとに実施した。参加者は、調査に協力することが可能な学生5名と筆者の計6名であり、筆者はモデレーターを務め、記録を取りながら、ICレコーダーで録音した。

3.4. 分析方法

FGIの音声データを、速やかに逐語化した。その逐語録から、本研究の目的に照らして、活動過程において、学生が問題と認識していたことが語られた部分に着目し、その問題が学生にどのような影響を及ぼしたのかを視点とし、分析した。また、ソフトウェア「KH Coder」を用い、抽出語の共起ネットワークを作成した。共起ネットワークは、抽出語は出現回数10以上、描画数60とし、中心性が高いほど濃い色、そして、重要な線だけが描画されるように設定した。「KH Coder」による共起ネットワークからも分析を行い、考察した。

4. 結果と考察

4.1. FGIによる分析

インタビュー総時間は、60分15秒であった。ゼミ生全員で取り組んだ創作オペレッタの活動過程において、学生はさまざまな問題がある中で、大きく2つの問題を認識していたことが明らかとなった。

4.1.1. 製作について

まず、FGIにより、製作に時間がかかったことが語られた。以下は製作に時間がかかったことについて「木」と「星のかぶりもの」の事例である（事例1、事例2）。

事例 1 : 木

- 001 (A) : 木ってさ、大きい画用紙にさ、刷毛で糊塗って、ぺたぺた貼った？よね？糊を水で溶いてやったよね。
 002 (B) : 貼りつける画用紙の、たぶん。
 003 (C) : あの、茶色のさ。
 004 (B) : 木の、色。そこをボンドでつけてたって。
 005 (C) : うんうんうん。
 (中略)
 006 (A) : ボンドが、ボンドでやったときにくっつかなかった。何か剥がれちゃって、乾くとペロペロ剥がれちゃったから、糊でやった方がいいよって言われて、そこから糊で、べた塗りでやりました。

「木」について、学生はダンボールに茶色の色画用紙を貼ることで木の幹としたかった。その際に、ダンボールの土台に色画用紙を木工用ボンドで貼ろうとしたが(004)、剥がれてきてしまいうまくいかなかった(006)。そこで、造形の教員にアドバイスを求め(006)、糊を水で溶いて刷毛で塗ること(001, 006)により解決した事例である。糊を水で溶いて刷毛で塗る、という技法は、今まで使ったことのないものであったかもしれない。学生が使い慣れている木工用ボンドは、容器に入っており、本体を押すとボンドが出るため、安易に扱うことができる。しかし、大きな範囲に画用紙を貼りつけようとしたとき、うまくいかなかったことから、木工用ボンドは適切ではなかったといえるだろう。

事例 2 : 星のかぶりもの

- 001 (A) : ダンボールを切って、グルーガンで貼ったけど、取れちゃうし。切ったフェルトも、別にその、段ボールの形とか長さに合わせて切ったわけじゃなくて、何となくで切ってペッペッペッって貼っていったから。多分取れちゃったかな。
 002 (モデレーター, 以下 M) : ああ。
 003 (B) : 一番メインのほっしーがね。
 004 (C) : そう。
 005 (A) : うん、ベロンベロン。
 006 (M) : あ、一番ひどかったの、B君のが。
 007 (B) : そうです。
 008 (B) : それ以降のはちゃんと2人、こう長く切って、こう。
 009 (A) : 何か、ここの面が、星、星型に切ってあればいいんですけど。
 010 (B) : そうそうそう。
 011 (A) : ここまでベトッてなって、ここにまたベトッて貼って。
 012 (B) : そうそうそう。
 013 (A) : 割れ目が入ったよね。
 014 (B) : 壊れかけのほっしーみたいな。
 015 (A) : そうそうそう。

事例 2 においては、主役の「星のかぶりもの」について語られたが、星役が 3 人いる中で、初めの 1 つがうまく製作できなかったことにより、残りの 2 つは比較的スムーズに製作が進んだことが推察された。星の辺に合わせず、何となくの感覚でフェルトを切り、貼りつけていった結果(001)、フェルトの上にフェルトを貼ることになったり、うまく張りつかなくなったり、見た目のよくないフェルトの切れ目ができてしまったりしたことが考えられた(001, 005, 009, 011, 013)。それは、遠くから見るとわからないが、近くで見たとき、あまり美しいとはいえないだろう。しかしながら、1 つ目の星のかぶりものがうまく製作できなかったことを次につなげ、残りの 2 つは星の辺を合わせてフェルトを切ったのであろう(008)。また、辺に合わせて切られたフェルトを貼りつけることは、フェルトの上にフェルトを貼ることにつながりにくいと考えられる。うまくいかなかったことから学ぶ学生の姿を読み取ることができる。

4.1.2. 練習時間について

次に、FGI により、練習時間について問題があったことが語られた。練習時間について語られた部分は、活動中盤期と活動後期とに分けることができた。以下に事例（事例 3、事例 4）を示す。

事例 3：練習時間—活動中盤期—

| | |
|-----|---|
| 001 | (A)：やっぱり、その、製作の方に、力を入れてたといえば入れてたかな。だから、あんまり、そういう、劇の練習はしなかったし。 |
| 002 | (モデレーター、以下 M)：まあ中盤は、あんまり、できなかったですね。 |
| 003 | (A)：ほっしーがいなかった。 |
| 004 | (B)：そこまで代役だったもんね。 |
| 005 | (C)：そうそうそう、そっか。 |
| 006 | (B)：どうする？って。 |
| 007 | (A)：D が休んでて、ほっしー、ほっしーのメイン役がないから、こう、やりづらかった。 (中略) |
| 008 | (M)：うん。D がいないと、どういうことに困りましたか？ |
| 009 | (C)：主役がないから、進まない。 |
| 010 | (A)：主役のセリフを覚えてる人もいないし。 |
| 011 | (B)：そうそうそうそう。 |

事例 3 において、練習時間が少なかったことについて語られたが、2つの理由があったと考えられた。その理由は、まず、製作に時間がかかっていたこと(001)、そして、主役を演じる予定の学生がいなかったことである(003, 007)。製作物ができあがらないということは、創作オペレッタの世界観が整わないということである。つまり、学生間でイメージの共有がなされにくいということが考えられる。製作に関しては、目の前のことに一つひとつ取り組んでいた時期であるといえる。その中で、時間軸とともに、活動状況全体を見通す余裕がなかったといえるだろう。さらに、主役の学生がいないことにより、創作オペレッタの練習を行うことが難しかった状況(004, 009, 010)が推察された。

事例 4 では、本番が近づくにつれ、製作の時間と創作オペレッタの練習の時間を決め、見通しをもちながら活動を進めていたことが明らかとなった。何故それが可能となったのかについて、意見を出し合えるようになったことで、スムーズに活動が進んでいくことを実感していた学生(005, 007, 010)、本番が近づくにつれ自分の意識が変わり積極的に動くようになった学生(011)、およびチームワークがよくなったことを実感していた学生(012, 015, 017)の語りから読み取ることができる。本番が近づく中、終わっていない製作物を進めること(002)と同時に、創作オペレッタの練習も進め(002)、演目の完成度を高めていくことを可能としたのは、コミュニケーションが増えたことによるものといえるだろう(005, 007, 010, 012, 015, 017)。また、本番が近いという焦りも、学生の「やらなくては」という気持ちに影響を与えていたと考えられる(011, 012)。そして、積極的に動く周りの学生の様子や(005, 007, 010, 012, 015, 017)、変わろうとしている学生の姿(017)を通して、学生同士の相互作用により、活動がスムーズに進んでいったことが推察される。

事例4：練習時間—活動後期—

- 001 (モデレーター、以下 M)：劇の練習時間が少なかったことってどうやって乗り越えたの？
- 002 (A)：製作をするとき、ゼミのとき以外にやったりして。ゼミのときは、できるだけ劇の練習、みたいにしてたかな。
- 003 (M)：うんうんうん、そうだね。やっぱり製作が整ってこないと、動きの方に入れなかったよね。うん、流れとかね。確かに確かに。
- 004 (B)：はい。
(中略)
- 005 (B)：最後の方はけっこうみんなが意見出して。
- 006 (C)：しゃべって。
- 007 (B)：ね、いろいろ言ってくれたり、意見を出し合ってたから、けっこう、いろんなことがスムーズに、いったのかな、製作これ終わってないから、私やるよ、とか言ってくれる子がいたり。(中略)みんなもう、自分が終わったことがあったら、終わったけど次残ってる？とか聞いてくれたり、みんな聞いてくれました。終わった子が他のとこ手伝ってくれたり。
- 008 (M)：え、途中まではそういうことはなかった？
- 009 (C)：与えられたことをやって、って感じ。
- 010 (B)：けど、最後の方はもうみんなが自分から？言ってくれていたから、すごくスムーズにいった。
(中略)
- 011 (A)：個人的には、終盤になって、焦り、焦りが出てきた。それこそ製作が、本当にあと数ヶ月しかないのに全然進んでいなくて、あ、やばい、ってなったりとか、そのときも、その、台詞とかも全然覚えていない人もいたし、劇も全然、何かうまく流れがきれいになっていなかったりしたから、あ、やばいな、って思ってから、やるように、積極的にやるようになった。
(中略)
- 012 (D)：でもみんな最後の方になるにつれて、焦りとか、製作の、まだ全然できてないっていう感じの、焦り？があったと思うけど、それ以上に、仲良くなっていたから。製作も、声かけが多くなって、スムーズに？手伝ったり、できていたから。本当に、仲良く、なってたのは、チームワークですごい大きいかな、最後の辺に。楽しく。
- 013 (M)：何で仲良くなれたんだろう？
- 014 (D)：みんなが同じ、劇を成功させるっていう思いはみんな一緒だったから、そういう、思いが一緒だったから。
(中略)
- 015 (C)：多分、そうやって製作の途中に、これやってーあれやってー、って言って、いいよー、っていうコミュニケーションとか。楽器の演奏とか踊りもそうだけど、コミュニケーションをとっていく時間がどんどん増えていったから、どんどんその、横のつながりが太くなっていくのが目に見えていて、何か、絆が見えた気がした。
- 016 (M)：何でコミュニケーションが多くなったんだろう？
- 017 (C)：うーん。率先して声かけてくれる人がいたから。Eとかもそうだし。FとGもかけてくれていたんで、そうやって声かけてくれる子がいたから。(中略)周りが、動かそうとしてくれている人のおかげもあったし。その人が、変わろう、っていうのもあったと思う。
- 018 (M)：あ、変わろうとしてるところとか。
- 019 (C)：そう、Hとか。
- 020 (M)：頑張ってる場所が見えたってこと？
- 021 (C)：見えました。

4.2. テキストマイニングによる分析

ソフトウェア「KH Coder」を用い、抽出語の共起ネットワークを作成した。以下に共起ネットワークを示す（図1）。

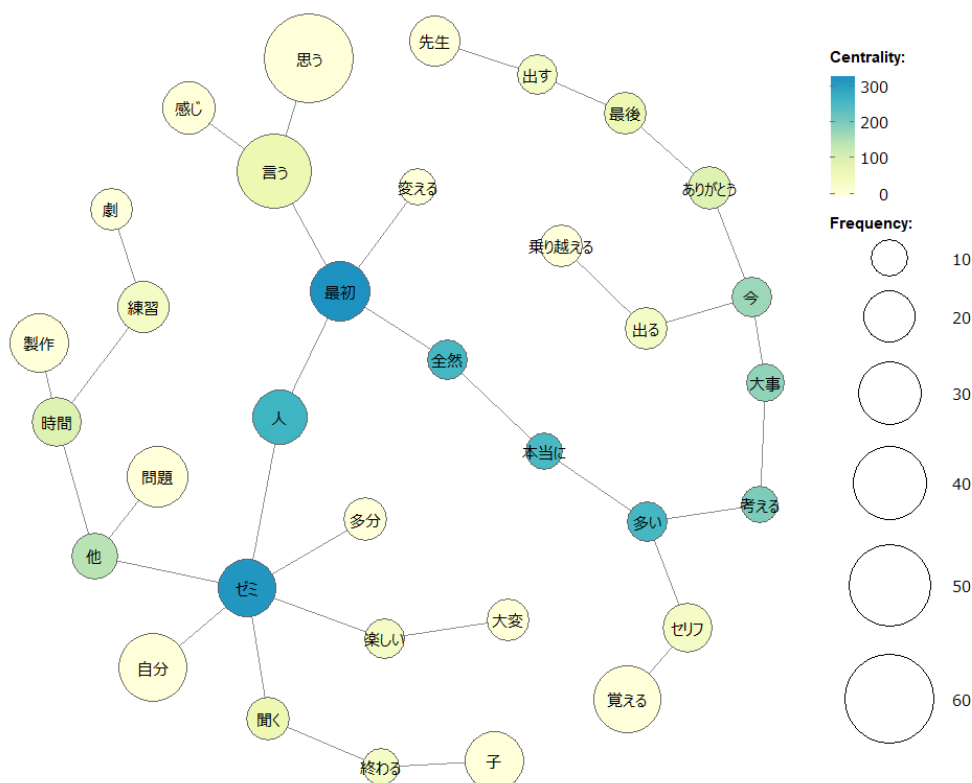


図1 共起ネットワーク（出現回数10以上）

図1の共起ネットワークから、中心性が高かった語のひとつは「ゼミ」であり、「他」と共起関係にある。「他」は「時間」「問題」とつながっている。「時間」は「製作」「練習」とつながっており、「練習」は「劇」とつながっている。また、「ゼミ」は、「楽しい」と共起関係にあり、「楽しい」は「大変」とつながっている。「ゼミで起こるさまざまな問題として時間内で製作や劇の練習を行う必要があった」「ゼミの活動は大変だが楽しいものであった」と解釈することができる。もうひとつ中心性の高かった語は「最初」である。「最初」は「全然」「本当に」「多い」「セリフ」「覚える」とつながっていき、「最初」はセリフが多く本当に全然覚えられなかった」と解釈することができる。逐語録からも「最初」の使われ方を検討したが、ネガティブな使われ方がほとんどであった。しかし、「最初」は「人」とも共起関係にある。「人」は、中心性が高かった「ゼミ」へとつながっていることから、「最初はセリフが覚えられず大変であったし、時間内で製作や劇の練習を行う必要もあった。ゼミの活動は大変だったが、楽しかった」と概観することができ、FGIでの語りとの整合性がとれている。

5. まとめ

5.1. 総合考察

保育者養成校の学生が、ゼミ活動である創作オペレッタに取り組んだ過程をふり返った結果、問題として認識されていたことは、「製作にかかる時間」と「練習時間の少なさ」の2つに大別することができた。これらの問題は密接な関係があったといえる。製作に時間がかかった結果、練習時間の少なさにつながっていたと考えられたからである。協働する表現活動の経験を通して、学生は視野を広げ、計画性や見通しをもつこと、そして、コミュニケーションを図ることの大切さを学んだと推察された。これらは、保育現場で生きる力であり、保育を志す学生にとって意義深い経験であったと考えられた。

今回、学生は自分たちでお話から考えるという創作オペレッタを行った。お話と大まかな動きの流れを考えたら、その世界観を実現するために、できることとできないことを見極めながら製作を進めていったと考えられる。しかし、「木」や「星のかぶりもの」を1回でしっかり製作することができなかった。「木」であったら、幹の部分を絵の具で塗るという方法もあったであろう。ダンボールに色画用紙を木工用ボンドで貼るといって、一見安易な方法を選択したことは、学生の造形に対する技術が未熟であることや経験の少なさ、そして、計画性のなさが浮かび上がったといえるのではないだろうか。また、1つ目の「星のかぶりもの」についても、何となくの感覚でフェルトを切って貼り合わせていた。うまくフェルトを貼り合わせられず、近くで見ると見栄えのよくない切れ目ができてしまっていた。この製作物も、学生の造形に対する技術の問題や、計画性のなさがあったと推察された。保育者は、限られた時間の中で教材の準備を行う必要がある。例えば、劇遊びや生活発表会の劇を計画する際は、見通しをもちながら、お話や製作物の全体像を構想する力が大切であると考えられる。保育者は、行き当たりばったりではなく、製作に関する専門的な技術をもとに、製作物を1回できちっとつくる技能が求められるといえよう。

練習時間が少なかったことについては、2つの理由があったと考えられた。その理由は、製作に時間がかかったこと、そして、主役を演じる予定の学生がいなかったことであった。製作をこなすことに追われていた時期であったということもできるが、全体を見渡し、活動の進行状況を把握し、活動を前に推し進める働きかけが誰かからなされてもよかったとも考えられる。本番が近づくにつれ、製作の時間と練習の時間とのバランスを取りながら、活動をスムーズに進めていたことが明らかとなった。時間の経過とともに、一人ひとりの意識の高まりや円滑なコミュニケーションの増加が、活動を推し進める原動力になったといえる。積極的に声をかけたり、自分の担当ではない製作物を手伝ったりする学生の姿は、周りの学生の意識の高まりや意欲に影響を与えていたと推察される。そして、「子どもに楽しんでほしい」という共通の思いをもつ学生同士の相互作用によって、活動がスムーズに進み、よい循環が生まれていたといえるだろう。

オペレッタは総合表現である。脚本や音楽に加え、衣装や大道具、小道具など、さまざまなものを準備していく必要がある。担任保育士は、活動の進み具合や、それぞれにかけられる時間を、全体のバランスを見ながら調整していく力が求められる。また、子どもの思いや発想を拾い上げ、話し合い、皆が納得して決めていくことも必要である。子どものやってみたい気持ちと、保育者のこのように育ててほしいという願いの重なるところに、子どもと創る創作オペレッタが位置づくところを考える。学生にとっては、やってみて初めてわ

かることもあったといえるだろう。劇遊びや劇の進め方そのものを経験し、協働する表現活動の醍醐味を味わったことに加え、課題を解決する力が高まったとも推察される。そして、自分の手指や身体を動かした体験は経験となり、今後大いに活かされると考える。

5.2. 今後の課題

今回の活動を通して、学生はイメージを形にしていく作業を通して、無から有へと創造することの楽しさや難しさも知ったといえる。それは子どもの頃の思いを追体験することであったのかもしれない。今後の課題は、ゼミ活動において、協働する表現活動を行う中で、表現活動ならではの「創造性」に着目し、学生が他者とかわりながら作品を創り出す過程を丹念にとらえ、質的研究を進めることである。

引用文献

- 1) 『令和2年度名古屋経営短期大学2020年度シラバス』(2020)
- 2) 同上
- 3) 同上
- 4) 朝野典子(2010)「音楽聴取と物語創作によるグループワークにおける学生の気づき」『鳳川学院短期大学教育実践研究紀要』第2号 pp.35-39.
- 5) 大塚習平・三上慧(2016)「保育者に必要な協働する力の育成—協働学習『壁面制作』を通して—」『湖北紀要』第37号 pp.53-69.
- 6) 文部科学省(2014)『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育, 大学教育, 大学入学者選抜の一体的改革について』(答申)(中教審第177号)
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf (2021年1月30日閲覧)
- 7) 山崎由紀子(2014)『幼稚園・保育園で楽しむ 身ぶり表現・ごっこあそび・劇づくり』フォーラム・A p.138.
- 8) 古屋祥子・沢登芙美子・高野牧子(2012)「保育者養成校におけるオペレッタ創作活動の教育的効果—2011年度『総合表現演習』の実践から—」『山梨県立大学人間福祉学部紀要』第7巻 pp.31-48.
- 9) 斎藤竜夫・時得紀子(2010)「協働型の表現活動の実践をめぐる考察—保育士・教員養成課程の学生への意識調査をもとに培われる力に着目して—」『暁星論叢』第60巻 pp.23-39.
- 10) 山本裕之(2021)「オペレッタ表現活動における一考察—保育者・教員養成校における実践から—」『神戸親和女子大学児童教育学研究』第40巻 pp.129-159.
- 11) 安梅勅江・片倉直子・佐藤泉・湊田英津子・西田麻子・大中敬子(2003)「フォーカスグループインタビュー活用の意義—『健康日本21』への住民の声の反映に向けて—」『日本保健福祉学会誌』第9巻第2号 pp.45-54.
- 12) 萩原赫子(2012)「オペレッタ」全国大学音楽教育学会編『新訂 幼児音楽教育ハンドブック』音楽之友社 p.27.
- 13) 南谷悠子(2020)『『オペレッタ』を通しての表現活動』石井玲子(編)『表現者を育てるための保育内容「音楽表現」』教育情報出版 pp.135-136.

14) 同上 pp.135-136.

付記

本論文は、日本乳幼児教育学会 31 回大会において行った研究発表をもとに、加筆、修正したものである。

執筆者の所属と連絡先

鈴鹿大学短期大学部 こども学専攻

Email : y-nanya@suzuka.ac.jp

How Will the Experience of Collaboration Affect Students of the Nursery School?

-Focusing on the Activity Process of the Creative Operetta-

Yuko NANYA

Summary

The purpose of this study was to reflect on the process which the students of the nursery school worked on Creative Operetta by making use of group interviews conducted about half a year after the presentation. Specifically what kind of problems were recognized as problems and to clarify what kind of influence it has had on students. It has become clear that there were two major problems in the activity process; one was the time it took to make and the other was the shortage of practice time. However, it can be said that these are related. As the time required for production increases, practice time decreases. As the performance time approached, it became clear that the activities proceeded smoothly by balancing the performance time and the practice time. With time, it can be said that the heightened awareness of each individual and the increase in smooth communication helped to become the driving force for promoting the activities. It is speculated and appeared that the students actively talked to each other and helped to make the products that they were not in charge of. That has influenced on awareness and motivation of the students among them as well. It was inferred that the students learned the importance of broadening their horizons; having plans and perspectives, and communicating through collaborative expression activities. It was thought that these were powers that could be used in the field of childcare and were meaningful experiences for students who aspire to childcare genre.

Key word : collaboration, creative operetta, activity process,
childcare worker training, expression